

また昭和26年の秋、本病には石灰硫黄合剤が有効であることを聞き、さらにダイセーンの出現をもみたので、早速、部落会や研究会に図つて協力を約束し、昭和27年から部落での防除試験を行うことにした。こうして行つた試験の結果は第1表に示した通りであるが、この場合の供試薬剤には何れも展着剤を加用し、撒布量は樹形ごとにちがつたが、ていねいに十分撒布する方法をとつた。調査は各区とも3本の樹をえらびその全果について行うこととした。この結果によると、兩種薬剤ともかなり、防除効果を發揮することがわかつたが、撒布回数は発病初期から少くも3回以上を要するようであつた。ところが、こ

の時期はちょうど農繁期にあたるため、2回以上の実施は極めて困難を伴う。そこで以上3ヶ年の試験結果から石灰硫黄合剤の場合は第1回を5月5日から10日の間に、第2回を同月20日から27日の間に行うこととし、ダイセーンの場合は第1回を5月10から18日の間に、第2回を同月20日から27日の間に行うことを定めて実施中である。昭和30年には動力噴霧機1台、ハンドブライザー20台を購入し、約30町歩を実施することができた。戦後の特産地には、いろいろな障害の波がおしよせているが、これらとまじめにとり組む技術も、吾々に果せられた大きな責務であると信じている。

ドーランクラブ員と一夜を語る

田村市太郎

(農林省北陸農業試験場)

大きな自在かぎが高い天井から懸けられて、赤々と焰を立てる炭火の上に、大鉄ピンを吊つている。いろいろを困んだ顔もが、感激を紅潮させ、瞳を輝やかして語り合つている。山荘の一夜。外は軒場を覆うて屋根にまでその頂を連ねた深雪である。物音ひとつしない山の雪原には隣県と境する山の尾根が、わずかにある天空の微光に姿を浮べている。雪の断崖をふみしめながら登つてきた路々が思い出される。「昨日ここで熊が一頭とれましたよ」と、こともなげに民家の裏につづく竹藪を指すY君の姿、細い1本道に立ち止つて吾々を通してくれた山狩り仕度の村人たち、すみませぬ、と礼を言うと、ホイホイと挨拶を返してくれるあの声などが、耳の底にいつまでも山の呼び声をひびかせて消えない。ここは富山縣福光町の奥にある山荘である。そして此処に集つた5人の友達こそ、そのドーランクラブ員である。即ち、山崎秀信君、高橋繁成君、西野二郎君、西良太郎君、山口祐二君がそのメンバーである。沸々とたぎる大鉄ピンの湯気を、誰からともなく茶腕に移して、論議はいつ果てるとも知らない。普及員の人生行路、試験研究と普及の間にある

問題点、青壮年や老年の年齢構成と普及のありかた、技術者は一体政治を知るべきや否や、農業企業化の諸問題、集団共同防除の技術的経済的解剖はいかにすべきや、稲作省力化問題、農業撒布機具に対する馴致と正しい応用はいかに考うべきか、多角経営新傾向は求め得られるものか等々について、研究成績の検討、普及上の体験、農家の声々を広範囲に且赤裸々に持ち出して、現状から明日への討議が熱心に行われた。訪問者である私と藤畑氏と常楽氏も熱意の渦巻きを巻きつ返しつつながら時のたつのを忘れていた。夜気は沈々として更けていく。三更、四更、そして、わずかなりとも休もうかと云い出したのはすでに暁の光が雪原に漂うころであつた。このクラブは、本会の立派な支部である。いやそれ以上の清純な熱意を以て本会に迫り、期待し、批判し、共に向上を願う旺盛な心のほどばしりを持つている。物ごとの発展の基礎時代は、単なる数よりも充実した質が切りふだとなるろう。こうした普及技術者の心の結束を訪問できたことは何よりも幸いなことであつた。このクラブがより一層みがきゆかれて行くことを心から祈念してやまない。